

## 「人種」とはなにか

尾本恵市『分子人類学と日本人の起源』（裳華房、一九九六年）より

一九五〇年頃まで、自然人類学の二本の柱といえ、化石人類の系譜の復元および「人種」の分類でした。私も学生るとき、様々な「人種」の身体的特徴についての講義があり、参考書として見たドイツ語の人種学の本には何十という「人種」が、まるで昆虫の亜種のように詳しく分類してあるのに驚いたことを覚えています。（中略）

民族が言語や風俗・習慣などの文化的な特徴による区分であるのに対し、「人種」は身体的な特徴だけで区分すべきものであることをはじめ明確にしたのは、ドイツのヨハン・ブルーメンバツハでした。かれは、一八〇六年に出した本の中で、皮膚の色や頭の形、鼻の形、毛髪の形などの特徴により、五つの「人種」を区別しました。コーカサス人種、モンゴリア人種、エチオピア人種、マレー人種、アメリカ人種がそれです。これらの名称は、各人種の起源の地を想定して付けられています。それに対し、皮膚の色だけに着目して、「白色人種」、「黒色人種」、「黄色人種」という名称を提案した人もいました。このほか、十九世紀末から今世紀に前半にかけて、実に様々な「人種」の分類が出されました。研究者ごとに違うといってもよい、少ないものでは二つ、多いものではなんと二〇〇もの「人種」が区分されたのです。（中略）

古典的な人種分類は大きな問題点をかかえていましたが、それらは次の三点にまとめられます。

第一は、「人種」という概念が多分に類型学的なものであるということです。類型学（タイプポロジ）とは、なにかある現象を一つのタイプ（型）または「典型的」な特徴で表し、細かい内容や変異などは無視するというものです。つまり、もともとヒトにはブルーメンバッハのいう五つほどの純粋な「人種」しかなく、一つの「人種」のメンバーはみな同じ身体的特徴をもっていて個人差などは存在しなかった。しかし、人口が増えるにつれ分布を拡げ他の「人種」と混血を繰り返したため、現在のように個人差が多く見られるようになった、ということです。ヒトの集団をこのようにとらえることは現代生物学では許されないことです。実験動物を除き、生物の集団には個体変異がつきもので、変異のない「純粋人種」などというものは存在するはずがありません。

第二の点は、「人種」の区分に用いられたのがもっぱら少数の外観的な身体の特徴であったことです。皮膚の色、頭の形、鼻の形、毛髪の形などがそれで、これらは「人種表徴」と呼ばれ、地理的に大きな変異をもつため、ヒトを分類するのに便利であると考えられました。しかし、これらの特徴の大部分は、実は気候などの環境条件に対する「適応形質」と考えられ、ヒトの系統を直接的に反映するものではないことに注意せねばなりません。たとえば、皮膚の色は、皮膚の表皮にあるメラニン色素の量の多少により決まりますが、この色素は太陽光線中の紫外線から身体内部を保護するフィルターの役目を果たしています。熱帯地方の人々では、長年の適応によりこの色素が多くなっているため、皮膚の色が濃いのです。したがって、皮膚の色が似ているからといって、系統的に近縁であるとは限りません。古い人種分類では、アフリカの人びととニューギニアの人びとが同じネグロイドに分類されていました。しかし、両者は系統的には遠い関係に

あることが後に遺伝学的に示されました。先に述べた皮膚の色だけによる「白色人種」、「黒色人種」、「黄色人種」という分け方がいかにナンセンスであるかがわかるでしょう。

第三に、そもそも、「人種」というものの定義が人によってまちまちで、分類のための基準もなく、恣意的な分類が行われていたという点が決定的な問題です。「人種」の分類は「種」の分類とはまったく違います。種は生物の重要な交配の単位で、遺伝的に「閉じている」ものです。つまり、種を越えての遺伝子の交換は起きません。たとえば、ウマとロバとは別の種で、交配すれば子（ラバ）はできませんが、これには生殖能力がないので、結局ウマとロバとの間に遺伝子の交換は起きないのです。種の下分類単位が亜種ですが、「人種」はほぼこれに相当します。亜種は交配により子孫をのこすことが可能ですから、生物学的に規定するのはむずかしく、結局、身体的特徴の差異により研究者が主観的に判定することになります。（中略）

こうして、一九六〇年代に人類学者は、古典的人種分類が破綻をきたしたことに気づきます。また、このころまでに、人種分類の社会的影響についても激しい論争が起きていました。それは、「人種」と知能の問題です。ある人が、アメリカの「白人」と「黒人」との間には知能指数に差があり、それは遺伝的な差異によると主張したのです。しかし、これに対しては、そもそも知能指数が遺伝的に決定されるとの証拠はなく、社会的、経済的な環境要因が大きく影響を与えとの反論があり、論争は科学よりもイデオロギーの色彩が強くなっていきました。人種に能力の差があると主張する人たちは、科学者であるよりも前に「人種差別主義者」であつたのです。また、不幸なことに、ヒットラーのもとのドイツでは、「アーリア人種」の優秀性を「証明」するために

一部の人類学者などが協力したという事実があるのです。人類学者はこのことを忘れてはならず、歴史の教訓とせねばなりません。人類学者の研究対象はむろんヒトですが、それは意識と感情をもち、グループを作り、互いに偏見をもちあうという本性から逃れられないわれわれ自身でもあるのです。これが、医学は別として、他の自然科学と人類学との決定的な違いであるといってもよいでしょう。われわれの種の内部に「人種」を区分するとき、人類学者の意図は差別ではないとしても、人種差別主義者に利用されるという危険性をはらんでいることも事実です。

このようにして、近年の人類学者は「人種」の研究を敬遠するようになり、教科書からも「人種」という項目が消えてゆきました。この本で私は、いままで人種というときわざわざ「かぎカッコ」を付けてきました。それは、このような歴史的事情がある、問題の多い概念であるからなのです。私としては、少なくとも学問的には「人種」という用語をもう使わないほうがよいと思っています。

ちなみに、民族については「人種」よりもやや明確に規定できるようです。文化人類学者の米山俊直さんの定義に従えば、民族とは「共通の言語、風俗、習慣などの伝統をもち、同族意識でむすばれる人の共同体」です。これは、現実生活しているわれわれの集団を表しています。これに対し、「人種」はどうやら幻想の産物であったようです。